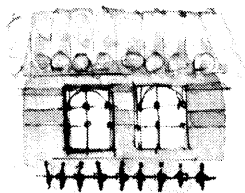


# 幼稚園の行事



## 飯沼佳子

はじめに

今年もまた、運動会の近いころとなった。

紅白帽子を配った日のことである。「帽子もらったよ、運動会にかぶるんだよ」と言いながら、かばんから、そつと大切そうに、帽子の端を見せてくれた三歳児の、顔じゅう喜びに満ちたあの姿が忘れられない。帽子一つからも、運動会への期待ははかりしれなく大きいことだろう。教師にとつては、プログラムを考え、遊戯を考え、飾りつけを考え、かけっこ、綱引きの練習をして……と忙しい日々となる運動会前である。が、子どもにとつて運動会は何かと考える時、あの期待をよりふくらませてあげられるような運動会でなければと思う。

こんなこともあった。夏、年長組が、美ヶ原山麓、三城牧場で一泊する合宿の時のことである。当日、あいにく早朝から、小雨が降ったり、やんだりしている。山小屋に電話する。山は降っていないとのこと。行く決心をする。その間、園へは引きも切らず、行くかどうかの問い合せの電話が来る。雨が降って行けないと子どもが泣いていると言うお母さんの声もある。無事行くことになり、貸切りバス

に乗る子どもたちの顔は、小雨にもかかわらず、どれもうれしそうで生き生きとしている。

子どもたちの行事への期待、ひいては、未知なものへの期待は、まず、喜びをもって受け入れられる。その喜びが、充足感をもって終結するかどうか、私たち保育者は考えなくてはならないと思う。

ともすれば、行事の形にとらわれ、子どもたちをそれ準備だ、練習だと縛ったり、行事をどのようにもつかとうことに注意がかたより、その行事で一人一人の子どもたちが、どんな経験をしているかを見失い勝ちである。

戒めなければならない。

わが園の年中の行事を、改めて見渡して見る。当り前のことかもしれないが、社会一般にある行事を園の行事としてとりあげているものが多いことに疑問をいだく。

年度始めに、年間の計画をたてる時、行事が多すぎはしないかとか、行事の妥当性に迷うのが例年のことである。

しかし、今までとりあげて来たからと、無批判にとり入れている行事のあることも否めない。今年は、思い切って、毎年行なって来た三月の発表会を、年長クラスだけとりやめにした。発表会を目ざして、劇、合奏等の準備をする、

その過程は、子どもたちがさまざまな経験をし、貴重である。それは、クリスマス一本にしぼって行なうこととした。父兄の思わく、子どもの経験と行事との関係等々、考え合せると、発表会一つをとりやめるにも勇気のあることを改めて感じた。

このような中で、教師、子どもが大奮闘する「やきいも大会」について記したいと思う。

### やきいも大会

秋の日ざしが弱くなり、暗さが園の林をおおうころ、突然、夏の明るさをとりもどすかのように、木々が紅葉する。それも束の間、アルプスおろしの冷たい風に、色づいた葉は落ち始め、いつか、林は落葉でうまり尽す。

晩秋は、子どもたちにとって驚きの連続である。驚きは子どもたちに生き生きとした活気をもたらしてくれる。

そんな秋の終りの一日、落ち葉を集め、やきいも大会をするのがわが園の恒例となっている。

前日から、子どもたちは落ち葉集めをする。集めてはその中にころがりこんだり、落葉をかけ合ったり、集めた葉



をどっさり持って、すべり台の上から「ゆきだろ」と言って散らしたりしながら集めるのだから、なかなか集まらない。

さて、やきも大会の当日となる。教師は朝から大わらわだ。落葉は夜露で湿っていて、なかなか火がつかない。また、うず高く積まれた落葉の奥まで火が通るには時間がかかる。子どもたちは白い煙にいぶされ、涙を流しながら周りでそれを見ている。教師も子どもも涙を流し、手や顔をすすで黒くして火の番をする。落ち葉が足りなくなる。

子どもたちは林に飛び込み、葉を集めて来る。大きなボテに威勢よく集めているのは男児である。おとなしい子どもたちは、拾った葉を入れる物にこと欠き、自分の帽子や小さなあき缶にひっそりと集め、すこしずつ、火のそばにあげては集めに散って行く。

落ち葉を集める子ども、ボテに入れる子ども、はこぶ子ども、火のそばで受けとる子どもといったの間にか分業作業が始まる。「もっと集めて来いよ」「おーい、葉っぱが集まったから取りに来いよ」等元気な声が飛びかう。

他の遊びをしている子どもたちも、時々火の所へようすを見に来る。始めからずっと辛抱強く見守っている子ども

もたちもいる。待つこと三時間余、教師が残り少なくなつた火種を取り除き、焼きたいもを取り出す。息をこらして待つている子どもたちの前に、黒く焼きたいもが次々と取り出される。一人ずつの子どもの口に入るのはほんの一片であるが、それを大切に少しずつ食べるのである。外側の炭のように黒く焼けた所まで食べて、口のまわりが真黒な子もいる。また、顔は朝からの煙で、教師も子どもも共にすけている。

昨年は園児の数も増し、自分たちで焼いたのもだけでは足りそうになかったので、本職の焼いたもが大半子どもたちの口に入った。

また、この日、年長クラスの子どもたちはシチュー作りをした。前日、家からすこしずつ持ちよつた野菜を、これも、自分で持ちよつた、皮ひきやナイフで刻み、用意をする。

園庭の一角の、教師が苦心して作つたかまどに大きななべをかける。燃料は、これも、子どもたちが集めた木の枝や木片である。

こちららも火をうまくたくために一苦勞である。風とともにまいあがる灰がシチューのなべに入りこみ、お母さんた

ちが見たら腰をぬかしそうである。

焼いても、シチューもでき上がり、待ちに待つた昼飯時である。

庭に机とイスがはこび出される。シチューと焼きもが、年長児も手伝つて全園児に配られる。思わずしらず、子どもたちの口からは「おいしい！」と言う声もれる。

園の周りは、田畑でうずまわっているとはいえ、子どもたちの大半は団地住いである。落葉を集めてやきいものできる環境の子どもはほとんどいない。初めての経験の子どもがほとんどであろう。

過去においては、田舎なら、大てい家庭が行なつていたであろう、こんな、なんでもないことも、今では、幼稚園で行なうしか、子どもたちは経験できなくなっている。

この行事は「食べる」のが最終の目的ではあるが、それに至るまでに、子どもたちは、数しれない多くのことを経験する。落葉や、木の枝を集め、煙に涙し、辛抱強く待ち、それにもまして自分たちの食べるものを自分たちで作らあげていくのである。

教師も、子どもも混とんとし、文字通り、真黒になつて  
す。す。一日である。

### さいふに

いくつかの行事を経て、子どもたちの生活の場はひろが  
り、子どもたちは成長して行く。

園で行事をとりあげる時、教師には、準備に、その計画  
に、といそがしさがついてまわる。しかし、一人一人の子  
どもを常に頭に置きたい。外側から見ての判断でなく、そ  
こで、子どもたちが経験する事柄から考えて、行事の妥当  
性を考え、行事のあり方を考えていきたい。

他国と地続きにある西欧や、東南アジアの国々とちがひ、  
島国日本は、古来より、国が安定しており、この国だから  
という歴史がある。そういつた土壌にはぐくまれ、また、  
折り目正しくめぐつて来る四季の移り変わりも加わつて、こ  
の国らしい古来の行事が数々ある。

端午の節句、七夕、節分、祭り、正月、桃の節句と幼稚  
園でとりあげたい行事もいくつがある。商業主義に流され、  
インスタントの品に流されていく現代にあつて古来の行事

も例外でない。だんだん形がゆがめられ、大きさになり、  
飾り物、着物など、物だけが形をとどめ、年毎にきらびや  
かになつて、コマージュリズムに乗せられつつある古来の  
行事のいくつかを考える時、ゆつたりと、ごく当り前に、  
本来の故事になつた形で、それらを経験させたいと思う。  
また、古来の行事には、この国の豊かに変化する自然、  
厳しい自然の中から生まれたものが多い。園で古来の行事  
をとりあげる時、特に自然とのふれ合いを大切にし、また、  
インスタントでない、自分たちの手で作りあげていく行事  
としてとりあげることを心したい。

(長野県松本青い鳥幼稚園)